

ポイント



- ひと目で、事実を正しく把握できる
- 多くの情報を、1つの図で伝えることができる

道具の解説

最も一般的に使われているQC7つ道具がグラフだ。グラフとは、互いに連関する2つ以上のデータの相関関係を表す図表を総称したものである。

モノづくりの現場における諸活動は、事実に基づくことが基本であり、事実を示すデータは極めて重要なものだ。しかし、数字の羅列だけでは、その数値の持つ意味合いを読み取ることは難しく、これらのデータを整理して、見やすくまとめて図にしたものがグラフなのだ。それゆえ、あらゆる業務でグラフはなくてはならないものと言える。

しかし、実務の現場では、正しい使い方をしていないために誤った判断をしてしまうこともある。まずは、グラフの使い方の基本を押さえておこう。

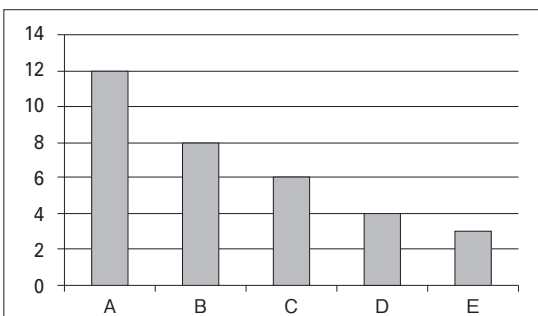
具体的な活用法

グラフはさまざまなものがあるが、まず基本的なグラフを押さえておこう。棒グラフ(図1)、折れ線グラフ(図2)、そして円グラフ(図3)だ。この3つの基本グラフを押さえておけば、ほとんどの場合に対応することができる。他にもさまざまなグラフがあるが、多くは基本グラフの応用版だ。

1. 棒グラフ

数や量を、棒の長さで表し、数量の大小関係が

図1 棒グラフのイメージ



ひと目で判断できるようにしたもの。

2. 折れ線グラフ

横軸に年・月・日・時間、あるいはロットなどをとって数量の推移、時間的な変化がひと目でわかるようにしたもの。

3. 円グラフ

円を構成要素の数に、扇形に区切り、構成項目の数量の全体に対する比率が、扇形の大きさで示し、比率(%)がひと目でわかるようにしたもの。

グラフの実践事例

現場での生産改善活動を考えてみよう。表1は生産活動の中で記録している特性値を、月度ごとの平均値で示したものだ。数字がばらついている

図2 折れ線グラフのイメージ

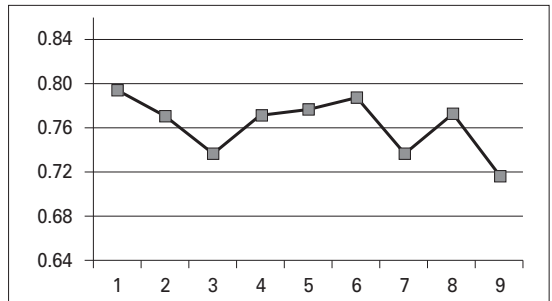


図3 円グラフのイメージ

